

# 如<sup>み</sup>來<sup>おや</sup>の光<sup>ひかり</sup>

獨尊

仰<sup>あお</sup>ぐも畏<sup>かし</sup>こきあみだ尊<sup>そん</sup>

乃<sup>いま</sup>し生<sup>いき</sup>とし活<sup>い</sup>くもの、

統攝

如<sup>み</sup>來<sup>おや</sup>は法<sup>の</sup>則<sup>り</sup>の主<sup>しゅ</sup>に在<sup>まし</sup>て

一切<sup>あらゆる</sup>諸<sup>の</sup>法<sup>り</sup>の原<sup>の</sup>則<sup>り</sup>なれば

歸趣

本<sup>お</sup>願<sup>さ</sup>攝<sup>め</sup>取<sup>まし</sup>ぬの夕<sup>ゆう</sup>日<sup>ひ</sup>かけ

幸<sup>さ</sup>福<sup>ち</sup>と光<sup>さ</sup>榮<sup>かえ</sup>に輝<sup>か</sup>やける

(七覺支の譜に同じ 四〇頁)

一切<sup>すべて</sup>の佛<sup>ほとけ</sup>と神<sup>かみ</sup>がみと

大<sup>おお</sup>み本<sup>お</sup>地<sup>や</sup>にて獨<sup>いと</sup>尊<sup>たと</sup>し

天<sup>あめ</sup>地<sup>つち</sup>萬<sup>よろず</sup>物<sup>す</sup>を統<sup>お</sup>べ攝<sup>お</sup>さめ

權<sup>み</sup>能<sup>て</sup>に係<sup>か</sup>らぬ物<sup>もの</sup>ぞなし

歸<sup>む</sup>依<sup>か</sup>かたを照<sup>て</sup>らしては

涅<sup>と</sup>槃<sup>きわ</sup>のみ國<sup>くに</sup>に引<sup>み</sup>接<sup>ち</sup>きぬ

無量光

無量壽如來の法の身は

聖旨の光を體得ひとは

無邊光

四智圓かなる朝日かけ

ひかりを被る撫し子の

無礙光

神聖と正義は嚴そかに

恩寵の母の靈育みには

無對光

本覺の宮に入りぬれば

眞理の父にましませば

無上法王位を輔處なり

み法の庭にてりわたり

菩提の花は開きそめむ

臨める父の威儀たかく

世嗣の聖子と成ぬらむ

絶對圓滿へだてなく

無上覺位の寶座には

燄王  
光

聖旨にそむける迷子が

つみの薪木を積れるも

清淨  
光

塵にまびれし稚な子が

清き光りのみそぎに

歡喜  
光

天うらゝかに歡びの

逍遙こゝろの樂しさに

威神の光まどかなり

惑と業となやみなる

炎のひかりに焚けつきぬ

肉我の感覺は汚るれど

五根淨とは成りぬべし

光りはれたるみ園にて

ときはの春は長閑なり

智慧  
光

さときひかり光やみに無明はれて

智見まなこの眼まなこひらくとき

不斷  
光

月のつき聖容みかおをみまつらば  
斷たへぬ光ひかりに動機うながされ

聖きよきみむねを悟さとらるれ  
己おのれを清きよめ他たをさそひ

難思  
光

ますくたかき至善すすみに向上すすみては  
永夜やみに眠ねむれる迷まよひ子こが

み子この天職つとめを果はたすなり  
召喚まねきのみこゑに驚おどろきて

無稱  
光

難思なんしの光ひかりを感じるうくにぞ  
聖せいなる靈應みたまに交感あうるとき

靈こころのあけとは成なりぬべし  
神秘しんぴ融合ゆうごういとたへに

月超  
日光

歡喜かんぎきはなく覺おぼほえて  
智悲ちひの日月ひつきの照てらす下もと  
犠牲ぎさげまつりし此身このみもて

聖きよきこゝろに更よみが生へる  
み子の數かずなる我われわれは  
聖意みむねに事つかへまつるなり

# 如 來 讚

み だ の み い づ は き わ み な く  
ひ ー か り か む ら ぬ も の は な し  
み ち か ら ひ ー と り す ぐ れ し と  
あ ら ゆ る ほ ー と け ほ め ま つ る

## 如によ 來らい 讚さん

(一) みだのみいづはきはみなく  
ひかりかむらぬものはなし  
みちからひとりすぐれしと  
あらゆるほとけほめまつる

(二) みだのみいづのみひかりと  
そのみさかえをほめまつり

- つねにこゝろにたえせねばきよきみくににうまるべし
- (三) あみだほとけのみひかりはてらさぬところなかりけり  
みなをとなふるひとばみなをさめてすてじととき玉たまふ
- (四) みだふかしぎのみさかえはこちたのさときことのほに  
たとへこのよのをはるまでとくともつきじどの玉たまへり
- (五) くるしきうみにしづめるはこゝろのやみのふかきにぞ  
むるのみやこにいたるにはあみだほとけをたのむべし

(六) われらこゝろのやみふかくはてしもしらでさまよひぬ  
すくひのみなをとなふればほとけよわれをたすけませ

光ひかりを獲うる因ちなみ

(如來讚の譜に同じ六七頁)

若もしひと如來みおやのみ光ひかりの

威神みいずの功德ちからを聞きまつり

日夜よをひにつぎ不斷みて聖名なを稱いひ

行住たちいおきふしおもい座臥ざ憶念おもいてぞ

三昧さんまいに神こころをこらしつゝ

聖旨みむねの現あらはれ祈いのりなげ

恩寵めぐみの光ひかりに融とけあ合あうて

聖きよきこゝろに復よみが活がへり



有う余よの依この身みを捨すてずして

いよ、天つと分めを果はたす日ひは

光ひかりを獲えたる果か

無む為い泥ない洄おんのみやこには

金こがしろがぬまに眞しん珠じゆ

舍しや那な圓えん滿まんのみすがたは

無む量りょうのボサツ聖まか衆さつは

樂たのしきそのに栖すみあそび

眞み實お報や土のに入いりぬべし

(如來讚の譜に同じ六七頁)

逍の遙どと有う無むを離はなれにき

るり寶ほう石せきのみや居いなる

相そう好ごう光こう明みきはもなく

雲くもの月つきをかこむ如ごとと

常樂我淨の靈みそのには

我われらかじこに到いたるとき

因圓果滿いんねんかまんのあしたには

三身一如さんしんいちによの理りをさと

願ねがはくは我われもろびと、

聖きよき心こころをおこしては

# 光ひかりの生せい活かつ

幸福さいちとさかえの花はな匂におふ

聖衆同時しやうじゆどうじにほめた、ふ

佛ほとけと平等おなじくらゐにて

十方度生よをすくうこときはなけむ

同おなじく心光ひかりを被こうむりて

やすきみ國くにに生うまれえむ

(如來讚の譜に同じ六七頁)

自性じしやうもとより淨きよらけし

聖せいなる光ひかりを感じうけぬれば

如來みおやの慈悲なさけいとふかく

すべての惱なやみも薄うすらぎて

光ひかりのうちの生活くらしには

きよき光ひかりをかうむれば

内うちには充みてる智慧ちひの徳とく

肉かたち我がの氣質さぞ汚けがすなれ

聖きよきみむねも啓示しめされむ

我われらが感情こころに融合あうとき時は

平和へいわと歡喜かんぎの極きわみなく

身みをも心こころもやすらけし

非靈いやしき氣質さもきよめられ

面おもてはおのづと麗うるわしく

まど  
圓そなかに備はる人格ひとがらは

みむね  
聖旨そむに背きてぬば玉たまや

ち  
千とせの獄ひとやもみ光ひかりに

しろうじゆ  
聖衆たの稱たへ

みおや  
如來まことの眞理ひかのみ光ひかりは

きよ  
神聖ただしと正義ひの日は明あけく

よろづの徳とくは圓まどかにて

すべて  
一切ぶつだの佛陀ひじりらも聖等も

みむねあら  
聖意すがた体現はす相なり

みつ  
三やみじの闇路みにおつる身みの

たちま  
忽あけち明なりくは爲なりぬべし

(如來讚の譜に同じ六七頁)

きよ  
聖なかきが中なかにいとときよく

さと  
智慧なさけと慈悲つききよの月清し

て  
照なくらさぬ隈なも無なかりせば

みとく  
聖徳たを稱たへぬ者ものぞなき

# 諸根悦豫讚

み - だ の じ あ い は と こ し え に  
 あ - め と つ ち と に み ち み て り  
 さ ま や の ゆ - か に と け お う て  
 え つ よ き - わ み な か り け り

(一)

三さん相そうの聖せい歌か

諸しよ根こん悦えつ豫よ讚さん

彌み陀だの慈じ愛あいは永とこしへに

天あめと地つちとに充みち満みてり

三さままの床ゆかに融とけ合あふて

悦えつ豫よ極きわみ無なかりけり

(二) 慈愛じあいに満みつる彌陀みだの面おも

靈きよき姿すがたを想おもほえば

(三) 念佛ねぶつ三摩耶さまやに心こころすみ

神秘しんぴ不思議ふしぎの靈感れいかんは

(四) 我わがみ佛ほとけの慈悲じひの面おも

照てるみ姿すがたを想おもほえば

(五) 春はるの氣きにあふ櫻花さくらばな

色いろと香かおりに現あらわるは

朝日あさひまばゆく輝かがやける

悅豫えつよ極きわみなかりけり

慈悲じひの聖旨みむねに融とけあ合あふて

悅豫えつよ極きわみ無なかりけり

朝日あさひのかけに映うつろひて

靈感れいかん極きわまりなかりけり

物ものこそ言いはぬ楽たのしさは

彌陀みだに觸ふれたる心こころかな

姿色清淨讚

(諸根悦豫讚の譜に同じ七四頁)

(一) 譬へば西に日は入るも

光は月に映るごと

無量壽王の日光は

牟尼満月に輝けり

(二) まげゆく照す朝日かげ

金剛石に映るごと

彌陀光王のみ光は

牟尼の姿に輝けり

(三) 譬へば明淨なる鏡

影は表裏に暢るごと

彌陀の光に映るへる

牟尼の姿の清らけし

(四) 無量光の朝日かけ  
むりようこう あさひ

牟尼の金のみ姿に  
むに こがね すがた

(五) 彌陀の光に映ろへる  
みだ ひかり うつ

金の色は妙にして  
こがね いろ たえ

光顔巍々讚  
こう げん きぎ さん

(一) 萬の山に立ちこえて  
よろず やま た

彌陀の朝日に映ろへる  
みだ あさひ うつ

三まやの窓を照します  
さまや まど てら

色映ろひて清らけし  
いろうつ きよ

牟尼の姿は清らけく  
むに すがた きよ

世にまた比ひ無かりけり  
よ たぐ な

(諸根悦豫讚の贈に同じ七四頁)

須彌の峯は聳えけり  
しゆめ みね そび

牟尼の威神は巍たかし  
むに いじん うず



(二) 日月摩尼の光さへ  
にちがつまに ひかり

彌陀の威神の極なきは  
みだ いじん きわ

(三) 彌陀の神聖なる聖旨  
みだ しんせい みむね

威神の光明極みなく  
いじん ひかりきわ

(四) 天つ魔羅の吹き起す  
あま まあら ふ おこ

み天さやかに照します  
み そら てら

(五) 宇宙に獨り尊かりし  
うちゆう ひと たか

人佛牟尼と現はれて  
にんぶつ む に あら

隠れて墨の如くなる  
かく すみ ごと

牟尼の光顔に現はるれ  
むに みかお あら

牟尼の光顔に現はれて  
むに みかお あら

三千界を震動す  
さんぜんかい しんどう

百の雷群雲も  
もも いかづちむらくも

月には障りあらざりし  
つき さわ

彌陀の威神の極なきは  
みだ いじん きわ

光顔けたかく輝けり  
みかお かがや

# 念佛三昧

まよ いぬる くもに かくれて  
 みえぬ なり わしのみ  
 やまの ありあけの つき

## 念佛三昧

(一) 迷まよひぬる雲くもにかくれて見みえぬなり

鷺わしのみ山やまのありあけの月つき

(二) 御名みなをよぶ聲こえにこゝろの雲くもはれて

さやかに見みゆる月つきの面おもかげ

(三) 雲くも晴はれてみそらさやかに照てらすなり

わしの山やまの有明ありあけの月つき

(四) 鷲わしの山やま己おのがすみかとなる時ときは

常盤ときわにほふ月つきを見るみかな

(五) 照てる月つきを己おのが心こころにすみぬれば

くらき路みちには迷まよはざりけり

七しち

覺かく

支し

(念佛三味の譜に同じ七九頁)

擇法たくはふこゝをぞとさやかに今いまはみへねども

月つきのかたにぞあくがれにける

精進す、みゆく道の遠とおさもおぼ、えじ

高峰たかねの月つきの見みまくほしさに

喜きまちいづるほのかに山やまの端はにほふ

月つき見るときはうれしかりけり

輕安おぼる夜よのさやかに月つきは見へねども

今宵こよいはこゝろのどけかりけり

定

月つきをみて月つきに心こころのすむときは

月つきこそおのがすがたなるらめ

捨

月つきかげに我われをはなれてすみぬれば

こゝろにかゝるうき雲ぐももなし

念

さぶなみにすがたはちやくにくだけても

月つきの光ひかりの映うつらぬはなし

精進覺支

(念佛三昧の譜に同じ七九頁)

(一) のぼりゆくつかれも今は覺ほえじ

高ねの月を見まくほしさに

(二) すゝみゆく道の遠さもおぼほえじ

高峰の月の見まくほしさに

(三) 月見むと思ふ心に誘はれて

身の疲れさへ忘れてしかな

(四) いさましく進すすまばみちのけはしきも

おぼえぬばかり安やすくこそあれ

(五) 呼よぶ御名みなに心こころの玉たまもみがかれて

みだの光ひかりは映うつろひにけり

定じよう

覺かく

支し

(念佛三昧の譜に同じ七九頁)

(一) 月つきをみて月つきに心こころのすむときは

月つきこそおのがすがたなるらめ

(二) さやかなる月つきにこゝろもすみぬれば

光ひかりのほかわかれに我われなかりけり

(三) 照てる月つきに我われをはなれて見みるときは

月つきこそおのがこゝろなるらめ

(四) 我われながらわれともいまはおもほえじ

照てる月つきかげにこゝろすまして

(五) 月つきを見みて月つきにおもひのすむときは

月つきこそおのがこゝろなりけれ